

日本語習熟度と学習環境が学習者のノダの選択傾向に与える影響

: OPI をレベル分けテストに

范 一楠 (環太平洋大学)

キーワード: ノダ, OPI, 選択肢問題, 習熟度, 学習環境

1. 研究目的

本発表の目的は、日本語習熟度 (OPI の中級と上級) と学習環境 (JFL 学習者と JSL 学習者) の要因がノダの選択傾向に与える影響を明らかにすることである。

2. 先行研究

坪根 (2002, 2004, 2009) は OPI の発話資料を用いて学習者のノダの用法別の使用開始時期と正用開始時期を横断的に調査し、それぞれ韓国語話者、英語話者、中国語話者の調査結果を示している。結果として、日本語レベルの高い学習者は日本語レベルの低い学習者より、ノダの正用に至る用法が多いと指摘している。また、中国語話者は他の 2 つの母語話者と比べて正しく用いられる用法の範囲が狭いと述べている。

この一連の研究は、OPI による日本語習熟度判定の結果を利用し、学習者のノダ習得プロセスを解明している。そこから 2 つの課題が得られる。

1 つ目の課題は、学習者がノダを使用していない文について考察することである。ある用法のノダの正用が多くても、非用も多ければ、習得とは言い難い。そこで、本研究は全発話を分析対象とすることによって、学習者のノダの習得の全体像を明らかにする。

2 つ目の課題は、各用法の問題数を統制して調査することである。学習者は基本的に会話の主導権を握ることができず質問に答える立場である。OPI 実施中、学習者の日本語習熟度に応じて話題やタスクが調整される。例えば、上級と超級学習者には意見と理由を述べるタスクが求められるため「理由説明」のノダが多く使用されるなど、話題やタスクがノダの使用回数に影響する可能性がある。

趙 (2008) は中国の大学に在籍する日本語学習者 100 名を対象に SPOT で日本語習熟度を中級と上級に分け、ノダを使用しなくてはならない条件と使用できない条件を合わせた 12 の条件で二者選択テストを実施している。その結果、用法によって正答率に差があること、日本語能力レベルが上がるにつれ、習得が順調に進む用法とまったく習得が進まない用法があることを明らかにしている。また、全体的に非使用条件に対する理解度が低いと指摘している。

上記の研究は、非用にも注目する点と、文脈情報の統制ができる筆記試験を用いたことにより、中国在住の学習者の日本語習熟度とノダの理解の関係を解明している。しかし、日本語習熟度判定の方法に関しては議論の余地がある。SOPT は習熟度が高い学習者の判定に向かないことと、上級と判定されたグループにも習熟度の差が存在する可能性が考えられる。また、学習環境の要因に関する検討が行われていない。

坪根 (2002, 2004, 2009) と趙 (2008) を踏まえ、本発表は日本留学経験 2 年未満と日本留学経験 2 年以上の日本語学習者を対象に、OPI を用いた日本語習熟度判定をしたうえで、文脈情報を統制した筆記調査を実施する。

本発表のノダの使用条件の用法分類は野田（1997）、益岡（2007）、名嶋（2007）に基づいて6分類した。ノダの非使用条件は『BTSJによる日本語話し言葉コーパス 2011年版』と『多言語母語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）』における学習者の不自然なノダの使用から抽出して3分類した。

3. 調査方法

調査手順は以下の通りである。

I. OPIによる日本語習熟度判定を行う

II. ノダに関する選択肢問題を行う

調査IIのみを行ったのは対照群としての日本語母語話者（NS）60名である。

調査IとIIを共に行ったのは日本滞在2年以上の中国人日本語上級学習者（JSL上級）30名、中国の大学院在学中で長期日本留学経験のない中国人日本語上級学習者（JFL上級）26名と中級学習者（JFL中級）11名である。

選択肢問題全部で24問ある。ノダの使用条件の6分類は2問ずつで計12問、ノダの非使用条件の3分類は4問ずつで計12問とした。それぞれの問題文中のノダを使用していない選択肢と使用した選択肢の内から1つ選んでもらった。

なお、設問の順番が結果に影響を与えないよう、設問の順番をランダムに並べ替え、4パターンの調査紙で調査を行った。

4. 調査結果

選択肢問題におけるノダの選択率を表1に示す。

<表1> 選択肢問題のノダの選択率（%）

大分類	小分類	NS (60名)	JSL 上級 (30名)	JFL 上級 (26名)	JFL 中級 (11名)
使用 条件	前置き	83	53	63	59
	語り途中	72	67	62	55
	語り始め	65	48	37	41
	事情（典型的用法）	59	48	69	55
	換言	55	27	44	36
	帰結	40	47	58	59
非使用 条件	相手の認識を維持する	8	18	27	41
	相手の認識を修正する	3	26	46	36
	相手の疑問詞疑問文に答える	2	18	27	32

※NSのノダの選択率が高い順

話者グループを参加者間要因、小分類を参加者内要因として2元配置の分散分析を行った。その結果、話者グループによる効果($F(3, 123)=4.747, p<.005$), 小分類による効果($F(8, 984)=5.995, p<.001$)が有意であった。また、交互作用($F(24, 984)=7.716, p<.001$)が有意であった。

Methodを用いた多重比較によれば、以下の話者グループ間に有意差があった。

<表2> 多重比較の結果

大分類	小分類	有意差があった話者グループ
使用条件	前置き	NS>JSL 上級
	語り途中	-
	語り始め	NS>JSL 上級, NS>JFL 上級, NS>JFL 中級
	事情 (典型的用法)	-
	換言	-
	帰結	-
非使用条件	相手の認識を維持する	NS>JSL 上級, NS>JFL 上級, NS>JFL 中級, JSL 上級>JFL 中級
	相手の認識を修正する	NS>JSL 上級, NS>JFL 上級, NS>JFL 中級, JSL 上級>JFL 上級
	相手の疑問詞疑問文に答える	NS>JSL 上級, NS>JFL 上級, NS>JFL 中級

表2の結果を踏まえ、習熟度と学習環境による影響を以下にまとめる。

- 習熟度と学習環境による影響が見られる項目は、使用条件の「語り途中」「語り始め」「事情」「換言」「帰結」および非使用条件の「相手の疑問詞疑問文に答える」であった。
- 習熟度のみによる影響が見られる項目は、「相手の認識を維持する」であった。JFL 中級学習者と JSL 上級学習者の間に有意差はあったが、JFL 上級学習者と JSL 上級学習者の間に差はなかったため、学習の効果だと考えられる。
- 学習環境のみによる影響が見られる項目は、「相手の認識を修正する」であった。
- 習熟度と学習環境の両方による影響が見られる項目は、使用条件の「前置き」であった。

5. 考察

上記の研究結果が、ノダの日本語教育指導に対して以下のことを示唆する。

まず、どのグループの学習者にも(1)のような「語り始め」にノダが使用できることを指導する必要がある。今まで日本語学では周辺の用法として捉えられていたが、母語話者のノダ選択率が2番目に高い。段落的発話によく用いられる形式として積極的に指導することが望ましい。

(1) ノダ選択率: NS 80%, JSL 上級 50%, JFL 上級 42%, JFL 中級 36%

あのう、昨日の昼、友達3人が遊びに来る予定だったので、料理をたくさん{()作りました/()作ったんです}。でも、約束の時間になってもだれも来なかったの、1人目に電話したら寝坊って言われて、2人目に電話しても寝坊、3人目に電話したらやはり寝坊って言われたんです。結局だれも来ませんでした。

つぎに、どのグループの学習者にも、どのような場合にノダを使ってはいけないかを教える必要がある。以下の(2)「相手の認識を維持する」、(3)「相手の認識を修正する」、(4)「相手の疑問詞疑問文に答える」はそのようなノダの例である。

(2) ノダ選択率：NS 2%，JSL 上級 13%，JFL 上級 23%，JFL 中級 27%

(パーティーの最後に)

A：今日は楽しかったですか？

B：ええ。とても { () 楽しかったです / () 楽しかったんです }。

A：そうですか。よかったですらまた来てくださいね。

(3) ノダ選択率：NS 0%，JSL 上級 17%，JFL 上級 50%，JFL 中級 55%

(Aさんが作った料理を、Bさんが食べた後)

A：料理、けっこう残っていますね。おいしくないですか？

B：いえ。とても { () おいしいです / () おいしいんです }。おなかがいっぱい。

A：そうですか。よかった。

(4) ノダ選択率：NS 0%，JSL 上級 23%，JFL 上級 42%，JFL 中級 36%

A：レポート、いつ出しましたか？

B：わたしはさっき { () 出しました / () 出したんです }。

A：あ、そうですか。

最後に、JSL 学習者には (5) のような「前置き」のノダの使用規則に関する明示的指導、JFL 学習者に「相手の認識を修正する」に関するインプットを増やすことが有効的であろう。

(5) ノダ選択率：NS 85%，JSL 上級 53%，JFL 上級 50%，JFL 中級 45%

A：就職活動、どうですか？

B：ああ、有名な会社の面接をいくつか { () 受けてみましたが / () 受けてみたんです } けど うまくいなくて、小さい会社でもいいかと思っていますところ。

6. 今後の課題

本発表は選択肢問題を用いて、学習者のノダの選択率を日本語習熟度と学習環境の観点から分析し、日本語教育指導に提言した。

今後の課題として、JSL 中級学習者の調査の実施、理解と産出の一致性を測定するための発話調査の結果分析が挙げられる。

参考文献

趙萍 (2008) 「中国人日本語学習者における「のだ」「のか」の習得—使用条件と非使用条件をめぐって—」『日本語教育』137, pp.11-20, 日本語教育学会.

坪根由香里 (2002) 「OPI における韓国語話者の「の」の使用と習得」『小出記念日本語教育研究会論文集』10, pp. 55-70, 小出記念日本語教育研究会.

坪根由香里 (2004) 「OPI における英語話者の「の」の使用と習得」『ICU 日本語教育研究センター紀要』13, pp. 93-106, ICU 日本語教育研究センター紀要.

坪根由香里 (2009) 「OPI における中国語話者の「の」の使用状況」『早稲田日本語教育学』4, pp. 43-55, 早稲田大学大学院日本語教育研究科.

名嶋義直 (2007) 『ノダの意味・機能—関連性理論の観点から』, くろしお出版.

野田春美 (1997) 『「の (だ)」の機能』, くろしお出版.

益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』, くろしお出版.